

今を生きる

岐阜市立精華中学校 3年

大藏 康太郎

「十年後の自分について、考えたことはあるだろうか。」今現在、ありとあらゆる情報が飛び交う中、世界中で想像がつかないほどの進化が続いている。そんな世界を今後担っていく私たち若者は、十年後いったい何をしているのだろうか。そもそも一昔前の人々で、現代のテクノロジーによって著しく変化した世の中をだれが予想できたであろうか。だからこそ、十年後の近未来社会を予知することなど、まるで出口のないトンネルをひたすら走っているようなものではないだろうか。「予測不能な社会」に向き合うために、私の「生き方」について考えていきたい。

私が小学5年生のとき、クラスメイトの誘いがきっかけでサッカーのスポーツ少年団に加入した。人数の少ないチームであったため、すぐ試合に出場できた私には、下積みや基礎練習を繰り返す期間は全くなかった。そのため心の中では、自分の力が優れているからだと慢心していた。試合の中でも、点を取られそうになるといつも私はセンターバックにポジションを代えられた。守備の中心を任された私は、コーチからも信頼されていると自覚してきた。キャプテンの座さえ、見えてきた。

しかし、私の前に大きな壁が立ちはだかる。小学校卒業間近、ある大会の決勝戦に私は出場した。0対0で迎えた前半残りわずか。私は相手選手との接触で倒れ、頭部を強く打って気を失ってしまった。気付いたときには、チームメイトや審判、コーチたちが私を囲んで集まっていた。何とか立ち上がった後ベンチから試合を眺めていたが、心配したコーチに病院に行くよう促された。病院でMRIを撮ると、右側の頭蓋骨にヒビが入っており、入院することになった。それからというもの、立つと気持ちが悪くなり、数週間は右耳が聞こえなくなった。おまけに記憶力も低下してしまったように感じた。リハビリすらできない生活が続いた。小学校最後の試合は、その入院から数週間後。私が運動できるには、最低でも2カ月は必要と医者に告げられた。1分1秒でも試合に出たかった。しかし、小学校生活最後の試合は、ベンチで観ているだけだった。もう一度、サッカーがしたかった。実は退院してから、誰も見ていないところで私は密かにトレーニングをしていた。あのときの私は遠い将来が見えなかったが、怪我をした中でできることに精一杯取り組んだ。決勝戦で試合終了の笛が鳴ったとき、ベンチにいた私が自然と笑顔になったのは、この努力があったからこそだと、今は思える。

未来の予測ができないのならば、目の前にある限られた条件の中で精一杯取り組む。これが変化し続ける「予測不能な社会」で、流されない自分を創る、「今を生きる」生き方ではないだろうか。私は将来、世界中を旅したい。そのために今、学校での英語の学習以外にも、スペイン語の習得を目指している。慣れないスペイン語をひたすら声に出して、ノートに書いている。この繰り返しだ。もしかしたら、十年後は、英語やスペイン語を学ぶ必要がなくなるかもしれない。しかし、「予測不能」だから学ばないのではなく、今できることをする自分でありたい。今日も自分の夢を叶えるために、私は1本の鉛筆を握っている。私の人生は、まだ始まりに過ぎない。計り知れない可能性を広げるためにも、精一杯「今を生きる」自分でありたい。